

2022年 第96回キネマ旬報ベスト・テン発表&表彰式 YouTubeライブ配信決定！

《2月1日(水)19時よりキネマ旬報公式YouTubeチャンネルにて》
10万円が当たる受賞予想キャンペーンも開催中！

2022年 第96回キネマ旬報ベスト・テン発表&表彰式のお知らせ

平素より、大変お世話になっております。この度、2023年2月1日(水)19時より、キネマ旬報公式YouTubeチャンネルにて「2022年 第96回キネマ旬報ベスト・テン」発表&表彰式のライブ配信を行うことが決定いたしました。

世界で最も歴史のある映画賞である「キネマ旬報ベスト・テン」の全16賞をBunkamuraオーチャードホールより無料ライブ配信にて一挙発表いたします。また、今年度は3年ぶりに会場に観客をご招待し、熱い声援とともに開催いたします。司会は笠井信輔アナウンサーです。また、本番に先立ち、各賞11部門の中から3部門を選んで受賞予想、すべての的中した人の中から抽選で1名様に現金10万円が当たる〈受賞予想キャンペーン〉を開催中。すでに1,500ほどの予想が届いており盛り上がりを見せています。

表彰式の視聴方法および受賞予想キャンペーンについては、公式サイト「キネマ旬報WEB」にアクセスしていただき、詳細をご確認ください。受賞者の皆さまの華やかな姿、笠井信輔アナウンサーの映画愛あふれる司会・進行を、この機会に是非ご覧ください。

是非、貴媒体該当欄にてご紹介いただけますと幸甚です。

【表彰式配信詳細】

■日時：2023年2月1日(水)

■時間：19時～配信(予定)

■内容：第1位作品&個人賞の発表、受賞者登壇の表彰式

※ベスト・テン表彰式の前に「映画感想文コンクール2022」の表彰も行います

《表彰内容》

第1位(日本映画作品賞)、第1位(外国映画作品賞)、第1位(文化映画作品賞)、日本映画監督賞、日本映画脚本賞、外国映画監督賞、主演女優賞、主演男優賞、助演女優賞、助演男優賞、新人女優賞、新人男優賞、読者賞、読者選出日本映画監督賞、読者選出外国映画監督賞、特別賞

■視聴方法：キネマ旬報社公式サイト「キネマ旬報WEB」詳細ページよりアクセス

サイトURL：<https://www.kinejun.com/>

【2位以下の発表とご掲載に関する注意点】

公式での2位以下の順位発表に関して

・2月3日(金)発売号の誌面にて全順位の詳細を掲載いたします。

・「キネマ旬報WEB」にて2月3日(金)10:00に全順位を掲載いたします。

紙媒体でのご掲載に関して

・全順位をご掲載いただく際は、2月3日(金)より、お願いいたします。

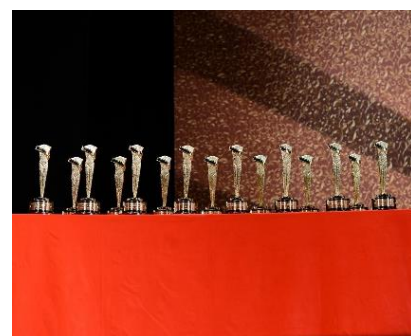
WEB媒体でのご掲載に関して

・全順位をご掲載いただく際は2月3日(金)12:00より、お願いいたします。

※情報の露出は、1月23日(月)をもって解禁といたします。

お問合せ：キネマ旬報社・森岡(morioka@kineju.com) 松本(matsumoto@kinejun.com)

今年の配信の様子



【2022年 第96回キネマ旬報ベスト・テン受賞予想キャンペーン】

- キャンペーン開催期間:2023年2月1日(水)正午まで
- 内容:キネマ旬報ベスト・テンの各賞(日本映画作品賞、主演男優賞など)11部門の中から3部門を選んで、それぞれの受賞作品、受賞者を予想し、キネマ旬報の公式 Twitter (@kinejun_books)をフォロー、#キネ旬ベストテン予想をつけて引用 RTしてエントリー。予想がすべて当たった人の中から抽選で1名に現金10万円を贈呈
- キャンペーン紹介ページ URL:<https://www.kinejun.com/2022/12/28/post-19793/>

《キネマ旬報ベスト・テンとは》

『キネマ旬報』は、1919(大正8)年に創刊し、現在まで続いている映画雑誌として、世界一の歴史を誇ります。最初に、キネマ旬報ベスト・テンを行ったのは、1924年度(大正13年)。当初は、編集同人のみによる投票で、〈芸術的に最も優れた映画〉〈娯楽的に最も優れた映画〉の2部門(外国映画部門のみ)でしたが、1926年(大正15年)、日本映画の水準が上がったのを機に、現在と同様〈日本映画〉〈外国映画〉の2部門に分けたベスト・テンに変わりました。戦争による中断があったものの、大正年間から継続的にベスト・テンは選出され続けており、2022年度のベスト・テンで96回を数えます。



※情報の露出は、1月23日(月)をもって解禁といたします。
お問合せ:キネマ旬報社・森岡([morioka@kineju.com](mailto:iorioka@kineju.com)) 松本(matsumoto@kinejun.com)

キネマ旬報ベスト・テンの特徴――

■世界的にみても、非常に長い歴史を持つ映画賞であること。
(今回で96回を数える。ちなみに、アメリカのアカデミー賞より1回多い歴史を持つ)。

■ベスト・テンという形で、その年を代表する「日本映画」「外国映画」「文化映画」を10本、さらに「日本映画」と「外国映画」には読者選出部門を設け、それぞれの10本を挙げるほか、「日本映画監督賞」「外国映画監督賞」「日本映画脚本賞」「日本映画主演女優賞」「日本映画主演男優賞」「日本映画助演女優賞」「日本映画助演男優賞」「日本映画新人女優賞」「日本映画新人男優賞」「読者選出日本映画監督賞」「読者選出外国映画監督賞」「読者賞」と、その年の称賛すべき作品・映画人を多面的に選び出していること。

■ベスト・テン及び各賞の選考者は、映画を多く見ている者に厳しく限定され、しかも選考者数が多く(2022年度はのべ120名以上)、さらにその年齢・所属の幅(映画評論家、ジャーナリストなど)も広いことから、当年の映画界の実勢を反映する、最も中立的で信頼に足る映画賞という評価を受けていること。

以上が挙げられます。

■特別賞に関して

『キネマ旬報』は2019年に創刊100周年を迎えました。1世紀の長きにわたり続けてこられたのは、多くの映画と映画関係者、何よりも映画ファンに支えられてきたからこそと確信しております。

そこで、100周年を迎えた2018年度より、より多くの映画人の業績を讃え、先達への敬意と感謝の意を表すべく、「キネマ旬報ベスト・テン 特別賞」を設けました。
(※過去にも2度、「特別賞」という名称での授賞がございましたが、本賞は創刊100周年を機に制定した新たな賞と位置づけております)

■文化映画に関して

社会、文化、科学、芸術、教育といった教養的な視点から国内で制作された映像作品で、ドキュメンタリー映画や短編など、幅広いジャンルを網羅しています。
一般劇場公開はされていない、公民館やホールなどで上映された作品も対象となります。

※情報の露出は、1月23日(月)をもって解禁いたします。
お問合せ:キネマ旬報社・森岡(morioka@kineju.com) 松本(matsumoto@kinejun.com)